

真仏土と大行

特別研究員 藤 嶺 明 信

1、大行として作用する真仏土

真仏土は「不可思議光如来」「無量光明土」と、光明で以って顕わされるが、その「破^ハ無明闇^{アン}」光明を親鸞は、「爾者称名能破^ハ衆生一切無明^{ミョウメイ}」能満^{マン}衆生一切志願^{シガン}、という称名の功德として了受したのである。それは、破闇満願の称名に、具体的に実働する光明の仏身・仏土を了受したからであり、故に称名の大行を「浄土真実之行」であり、如来による「選択本願之行」と標拳されるのである。

2、大悲の三願

親鸞は、「真仏土巻」に標拳される第十二願・第十三願と「行巻」に標拳される第十七願の三願を特に「大悲（誓）願」と呼ぶ。大悲の三願は、衆生に自覚を呼びかける第十八・十九・二十の三願に対応するものである。真実の信心は至徳の尊号を体とするものであり、大悲の三願は、普通の仏道の根拠を表わすものである。大悲の願で呼ばれる真仏土と大行との関係は、『大無量寿経』に如何に説示されているのであろう。

3、世に於ける自在

『大無量寿経』に於いて、法蔵菩薩は、世自在王仏の説法を聞いて悦びを懐いて無上正真道の意を発して、世自在王仏の所で自己の志願を徹底してゆくと説かれている。世に在りながら、しかもその世に於いて全き自在を得ている世自在王如来を師仏とする

ということにおいて法蔵菩薩は、世を生きるが故に苦悩し、しかも徹底して世を生きてゆく以外に在り様のない衆生の全き自由への祈りの声を深く聞き取ってゆかれたということであり、世を生きる苦悩の衆生の救済を憶念せられたのである。そして、そこに「我当修行攝取仏国、清浄莊嚴無量妙土」という浄土莊嚴を自己の根本の願いとされたのである。そして、五劫を具足して思惟攝取された莊嚴仏国の清浄の行が四十八願として表白される。その四十八願のなかの光明無量・寿命無量の二願を親鸞は、四十八願を真に無量の願行たらしめてゆく本源（根拠）として発見し、その二願を「大悲の本」と述べ、その二願を「真仏土巻」の標拳とし、無量の願行を生み出して来る本源として真仏土を了受されたのである。

その四十八願を説き終えたところに法蔵菩薩は「我至成仏道名声超十方 究竟靡所聞 誓不成正覺」と名号の流布を誓われるのである。法蔵菩薩の本願は、世を生きる苦悩の衆生が、世に於いて全き自在を得んが為に、そこに浄土の莊嚴を願うものであるが、その浄土莊嚴を願う四十八願はその具体的成就の為に名号が十方諸仏によって称讃されることを誓うのである。

4、未来の諸仏の発見

「ただ念仏」の教言に救済された親鸞は、その念仏の仏道を「敬白^{キョウハク}一切往生人等^{イツセツオウシヤウジントウ}」と一切衆生に語りかけてゆく。それは、自他を軽うしめて生きていた人間が、念仏に値遇した時初めて自己を尊重し他を尊重し、自他に向って往生を呼びかけて生きる存在と成れたということである。如来に根拠する念仏のみが人間に往生の道を聞くということをし受し、人間の様々の在り方の違いに対する価値評価の一切を捨てしめられた時、一切の衆生を無条

件に尊重してゆく道をたまたわったのである。それは、念仏成仏すべく生きている十方衆生を発見し、その十方衆生に未来の十方諸仏を感得したのである。

5、寿命無量

「真仏土巻」に於いて、真仏土を明証する経論の引文を結ぶ私釈には、真仏土は報土と仏性ということで押え切られる。念仏者は、念仏に於いて未来の十方諸仏を感得するが故に、具体的な人間に於いて未来の十方諸仏を拝見してゆけない、すなわち、仏性を拝見してゆけない事に痛みを感じる者であり、その不見仏性の悲しみが「到_二安樂仏国_一、即必顯_二仏性_一」という真に仏性が明らかになる世界（真仏土）を願ひ求めてゆくのであり、真仏土を願生してゆくのである。未来の諸仏を感得する帰命の心であるが故に真仏土を願生するのであり、また、願生の心があるが故に帰命が徹底するのである。かくして、帰命の仏道は願生の仏道である。

「真仏土巻」は光寿無量の願を標挙するのであるが、その寿命無量とは「彼仏寿命、及其人民、無量無辺、阿僧祇劫、故名阿弥陀。」と説かれるごとく、国土の人民の寿命が無量であることを願うものである。それは人民の寿命が無量の深広さを有することを願うものであろう。自我関心によって生きる人間は自他の寿命に無量の深広さを領いてゆけない存在である。それ故に、光明は自我関心を否定する智慧として作用して「破_二無明闇_一」し、そこに寿命の有する無量の意味を開顯してゆくのである。未来の諸仏を感得するといひ、仏性を拝見するといひ、寿命の深広さを領く

ということも「仏性すなわち如来なり。この如来、微塵世界にみちみちたまえり」と述べられる如来に値遇することに他ならない。しかし、それは具体的な人間のうえに領かれなければならない事柄である。

6、本願酬報の土

道綽が凡聖通往の報土として明らかにした阿弥陀の浄土を善導は本願で以って確かめてゆく。それは、報土とは「若我得仏十方衆生称我名号願生我国下至十念若不生者不取正覚」という本願の呼びかけを聞き取るところにしか開かれてこない事柄であるからである。その呼びかけに、阿弥陀が念仏往生をその本願としなくてはならなかった罪障の自身を信知し、十方衆生を発見した時、願生というかたちで報土を開かれるのである。

7、化土として作用する真仏土

真仏土を知らずに空過してゆく人間に真仏土を明らかにしようとした時、真仏土は、千差万別の人間の関心に応動して人間を真仏土へ導く路と成るのである。それが第十九・二十願に報いた方便化身土である。人間に応動する方便化身土なくしては、真仏土は人間にとって無縁な事柄となってしまう。故に、方便化身土として作用することにこそ真仏土の真実があるのである。

8、結び

以上、真仏土と大行との関係を尋ねてきたのであるが、一切衆生の救済を願う本願はそこに浄土莊嚴を願ひ、その浄土を明らかに知らせるために念仏を往生の道として廻向されるのである。ここに人間は、願生として浄土を開かれるのである。